

逐次通訳ノートから見た談話理解の方策

永田 小絵

(獨協大学・中国語通訳者)

One of the most difficult tasks in interpretation whether teaching in the classroom or performing on the job is to interpret a long segment of discourse in the consecutive mode. What as an instructor of interpretation should we be teaching our students to help them cope with this most demanding task? This paper analyses interpreter's notes in an attempt to substantiate this author's claim that our students need to learn to listen to the source text analytically with a particular focus on its textual structure before they become able to better understand and retain messages that are long enough to exceed the immediate limit of our short-term memory.

1. 問題提起

逐次通訳の指導が特に難しい項目は長文逐次通訳¹⁾である。また、通訳の実践においても長文逐次通訳は最も対応の難しい項目²⁾であると言えよう。

短文逐次通訳³⁾は、SL (起点言語)⁴⁾を聞き取れる程度の言語能力さえあれば、ほぼ問題なくできる。単文ごとの訳出は語学学習でもよくおこなわれている方法であるが、SLをTL (目標言語)⁵⁾に転換するためには、語彙と文法の知識およびSLの音をとらえる聴力があれば足りる。語→句→文というほぼ一方通行の情報積み上げ (ボトムアップ) による理解力によって単文の逐次通訳が可能であるといえよう⁶⁾。これはB言語を聴取しA言語に訳出する⁷⁾場合 (into A) のみならず、A言語からB言語への訳出 (into B) においても同様である。つまり、自らの母語を聴取する場合でも、単文ごとの再現は容易であるのに対し、長文の構造を保って再現することは困難であることは誰しも経験しているか、少なくとも記憶保持量の限界という点から肯んじることができらる。

NAGATA Sae, "Discourse Comprehension Strategies as seen from Interpreter's Notes"

Interpretation Studies (Special Issue), December 2000, pages 42-52.

© 2000 by the Japan Association for Interpretation Studies.

報告者が指導を担当する通訳者養成スクールの会議通訳訓練クラスにおいては、受講者の A および B 言語における語彙力、文法力、聴解力はいずれも非常に高いレベルにある。したがって、SL が一般的な内容であれば単文ごとに区切った訳出は、ほぼ問題なく対応できる。

一方、階層化した構造をもつ長文逐次通訳では通訳の難度が飛躍的に増大する。実際の教室授業における逐次通訳訓練で、2 分間程度の長さで SL を聞かせると内容を過不足なく再現することが非常に難しく、情報の脱落が顕著となる。しかし、同じ談話資料を短文（1 文～3 文程度）で区切った時には問題なく訳出できる。つまり、訓練生は一般的に言って、聴覚的な音の聞き取り、語の把握、文法的な理解力は問題のないレベルにあるが、次の段階にあたる談話を全体的かつ構造的にとらえる能力においては不足が見られると言える。前述したように、短文逐次通訳的な訓練は語学教育レベルでも手当されているが、通訳現場において見られるような長文逐次通訳は未経験であるため、要領がつかめないこともその原因であると考えられる。

さて、長文逐次通訳の訓練に入ると壁にぶつかる訓練生が多く、また多くの職業通訳者が話し手に対して「なるべく短く区切って話してほしい」と依頼するような状況がある⁸⁾ わけだが、これはどのようにして改善することができるだろうか。

談話を大きなまとまりとして全体的にとらえると同時に、その構造（話の筋道や組み立て）を把握する能力の不足は長文逐次通訳を行う上で、かなり致命的な問題である。通訳者が談話を聴取し終わって、聞き手に情報を伝達する段階になったときに、談話の全体像を把握していなければ、記憶に残った断片的ないくつかの語だけの情報に頼って分量の多い談話を再構成しなければならなくなる。これは通訳者の過重な負荷となって、筋道の通った滑らかな訳出を困難にする。この壁にぶつかった時に、訓練生の目は訳出の補助となるノート・テイキング⁹⁾（以下、NT）に向かい、特に通訳訓練初期段階においては「話の内容を忘れないために」聞こえてきた談話に含まれるなるべく多くの語を書きとめようとする傾向がある。しかし、語それ自体を脈絡なく書き連ねた、談話の構造を反映せず、情報の階層が視覚的に示されていない NT は長文逐次通訳の伝達効果¹⁰⁾に利がないばかりか、時には NT のために伝達効果が阻害されるような結果にもなる。

報告者は長文逐次通訳訓練の一環として NT 指導を行っているが、従来からの「縦方向」、「行頭の字下げ」、「並列表記」、「記号の使用」といった表面的なノウハウ¹¹⁾を示しても、それを実践できるようにならない訓練生が見られる。特にインハウス通訳（企業内通訳者）やエスコート通訳（随行通訳者）などの通訳経験があり、すでに短文逐次通訳だけで実践を積み重ねてきている場合には分量の多い談話の全体をとらえて談話の構造や情報の階層を視覚的に示す NT の習得が難しく、訳出もメリハリのないものになりがちである。

また訓練生の中には、NT の形式を示されると、その形式を踏襲しようとすることに気を取られて、NT を学習する前にくらべて訳出の結果が却ってレベルダウンしてしまう者も少なくない。すると、もっと根本的なところから談話の聴き方を改善しなければならない、

ということになるだろう。NT に気を取られる前に、まず談話をどうとらえるか、「対象に積極的に働きかける聴き方」とは何か、ということの問題の中心として考えていきたい。

2. 通訳の種類による時間的制約の性質の違い

音声言語や文字言語は線状性を有していると言われる。音声言語を聴取する際には、連続する音をまず語のレベルで分断し、それを統合して句とし、句に分断したものを文として統合し、分断した文の統合によって談話をとらえるという方策をとる。すなわち、音声言語の談話は語彙と文法の知識に依存して、分断と統合を繰り返しおこなうことにより理解される。

同時通訳の場合は、SL を聞きながら追従して訳出するので、かなりの程度までリニアな処理をしなければならない。そこで、聞こえてくる音を比較的短いスパンで統合・分断し、処理していくことになる。EVS¹²⁾ は比較的短く、SL で句から単文程度が提示された段階で TL 訳出が開始される。通訳者の処理能力に過剰な付加がかからないかぎり、オリジナルの発信形式としての線状性を踏襲した訳出が行われることになる。もちろん、EVS は、SL や個別の通訳者によってある程度の差は認められるが、原稿のない同時通訳で 2 センテンス以上も遅れて訳出するような場合はきわめてまれである。時には訳し落としを補うために数センテンス前の情報がデリバリーされることもあるが、これは例外的な処理と考えてよいだろう。

短文逐次通訳は、同時通訳に比べれば聴取から訳出までの間隔が長いとはいえ、進出情報を聞きながら既出情報を TL で再構成して表出するという特殊なスキルは必要ではなく、また長文逐次通訳のような記憶容量の負荷もほとんどない¹³⁾。

本論で取り上げる長文逐次通訳の場合は、かなり分量の多い情報を聞き終わってから訳出を開始するため通訳に特殊なスキルが必要になってくる。同時通訳が非常に短いスパンでのバッチ処理を行っていると考えられるのに対し、長文逐次通訳は長いスパンでのバッチ処理になるので、いわゆる「ための時間」（情報を保持している時間）が同時通訳とは比較にならないほど長くなる。

情報を保持しなければならない時間が長いということには、プラスの面もマイナスの面もある。言語情報は受け取る情報が多くなればなるほどメッセージの意図が絞り込まれるので、情報を確実に理解することができる。そこで、訳出の際にはより適切な TL の表現を用いることが可能になる。しかし、一方で通訳者が受け取る情報量は多くなるので、それをいかにして伝達開始から伝達終了まで保持するかが問題になる。つまり、同時通訳の場合は聴取から訳出までの時間が短いことが作業の難度を増しているのに対し、長文逐次通訳では逆に時間の長いことが難しさの原因になっている。

3. 談話の構造

SL に含まれるトピックと話し手の意図および談話の構造を TL で再現して伝達するのが通訳の役割である。まず談話を適切に理解するところから通訳の作業が始まる。談話には

さまざまな種類があるが、長文逐次通訳で扱うのは会話と文章語の間にあるタイプのテキストであると言える。具体的には式辞あいさつ、講演、レクチャー、交渉、記者会見の質疑応答などがこれに当たる。こうしたタイプの談話の特徴は（ここでは原稿読み上げ式ではない、即興のスピーチのことを指すが、日常的な会話ほど散漫でなく、かといって文章語に比べると密度が低く、情報の流れが整理されていないということにある。話し言葉と書き言葉の中間的なものであると言ってもよいだろう。

ここで具体的な例をあげて説明したい。SL は以下のような談話である。これは中国の唐外相の記者会見からとったテキストで、記者の質問に即興で答えたものだ。全体で3分52秒ある。次ページに日本語訳文を用いて1文ごとに分け、内容を書き出してみた。

中日關係在邦交正常化以后，迎来了一个熱潮。但是過了一段，干杯、友好的時代很快就過去了。那麼進入了一個實務的時代、務實的時代。現在我認為已經進入了一個全面的成熟的時代。我們看問題要看主流。究竟什麼是主流？形成主流？我認為在中國、在日本包括剛才（你/心）講的庶民階層在內，也可能在有些問題上存在不同的看法，甚至存在很不同的看法。有比較特殊的分（止支）。興奮之余也可能会講一些過于興奮的話。但是我認為這不是主流。我的看法是中日關係總體上來看，客觀地分析，還是良好的。至少是比較良好的。我對於中日關係，不悲觀，而且我是比較樂觀的。

那麼，為了使中日關係能（句多）更好地健康成長、能（句多）正常地發展，而且在各方面取得更佳豐碩的成果，我認為現在需要抓兩件事情。□一个是（平尼），需要發展高層的交往，包括領導人之間的交往。第二個要發展民間的各個方面的友好交往。特別是中年、青年之間的交往。我感^到我這次在東京和日本方面包括同日本領導人在會晤的時候，這兩點我們取得了重要的共識。我所想的也是日本領導人所想的，不謀而合。我相信，在我們雙方共同的努力之下，在中日之間的三個重要的文件的原則的基礎上，本着過去我們多年來，也是我的部^的首任部長周恩來總理所倡導的求同存異的精神平等相待、尊敬相互信任、促進合作，這樣的精神做的話，中日關係是一定会實現長期穩定的正常發展。

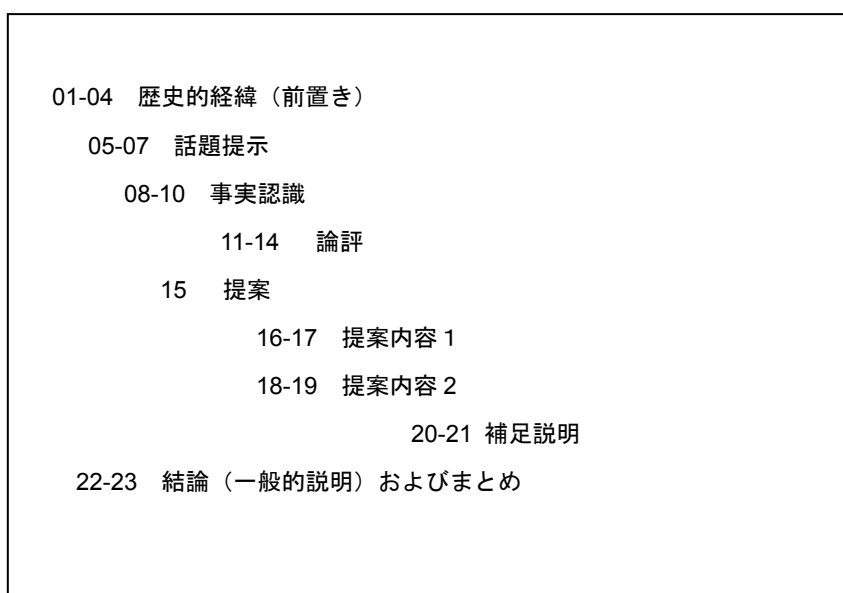
今后的中日關係，我認為應該是為了亞洲的和平與發展、為了世界的和平與發展的關係。【3'52"】

□：ポーズ □□：やや長いポーズ

太字網掛け：リンク 斜体：話し手の意見陳述開始マーカー

中日関係は国交正常化後、友好ブームを迎えた。	前置き	
01. しかし、一時期の、乾杯、友好万歳という時代はすぐに終わった。	歴史的経緯	↓
02. そして、実務の、実務的な時代に入っていった。	01-04	
03. 現在、私はすでに全面的に成熟した関係の時代に入ったと思う。		
04. 私は、我々はこの問題を考えるのに主流になっているものを見るべきだと思う。	話題提示	↓
05. いったい、何が主流なのか。	05-07	
06. 主流を形成しているのか。		
07. 私は、中国で、日本で、さきほどあなたの言った庶民階級を含めて、 おそらくいくつかの事柄に関しては、異なる見方、時には非常に異なる見方 があるかもしれない、と思っている。	事実認識	↓
08. 比較的、特殊な意見の食い違いがある。	08-10	
09. 興奮のあまり、感情的な発言をすることもあるだろう。		
10. しかし、私はこれが主流であるとは思わない。	論評	↓
11. 私の見方は、中日関係は全体的に見れば、客観的に分析すれば、やはり良好だ。	11-14	
12. 少なくとも、比較的的良好だ。		
13. 私は中日関係に関して悲観的ではなく、むしろ比較的楽観している。		
14. それでは、中日関係がさらに健全に発展することを可能にするためには、正常に 発展することを可能にするためには、そして各分野でよりよい豊かな成果を上げる ためには、私はいま2つのことをしっかりやらなければならないと考えている。	提案	↓
15. ひとつは高いレベルでの交流を盛んにすることだ。	15	
16. 指導者同士の交流を含めてである。	提案内容 1	↓
17. 2つめは、民間の様々な分野の友好交流を進展させることだ。	16-17	
18. とりわけ、中年や青年の相互交流である。	提案内容 2	↓
19. 私は今回、東京で日本側の、日本の指導者を含めて、会見したときに、 この2点について我々は重要なコンセンサスを得た。	18-19	
20. 私の考えていることは日本の指導者の考えていることと図らずも同じであった	提案に関する 補足説明	↓
22. 私は、我々双方がともに努力し、中日間の3つの重要な文書の原則に基づき、 我々がこれまで長年にわたって、つまり我が（外交）部の初代の大臣である周恩来 総理が提唱した「小異を残して大同を求める」精神のこの通り、平等に相対し、 尊重し、互いを信用し、協力を促進するという精神でやっていけば、中日関係は 必ずや長期安定的に正常に発展していくと信じている。	20-21	
21. 今後の中日関係は、私はアジアの和平と発展のための、世界の和平と発展のため の関係であるべきだと考えている。	結論	↓
	22-23	

以上の談話テキストを階層化すると以下のように図示することができます。

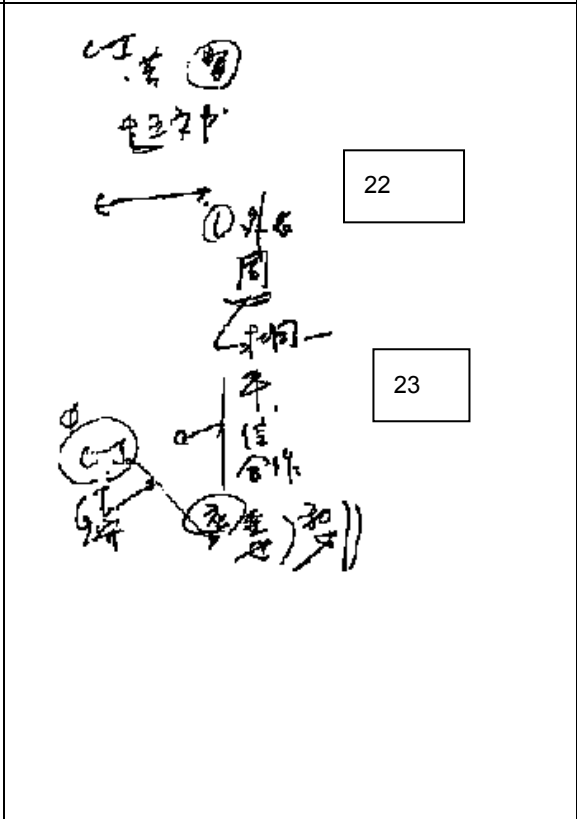
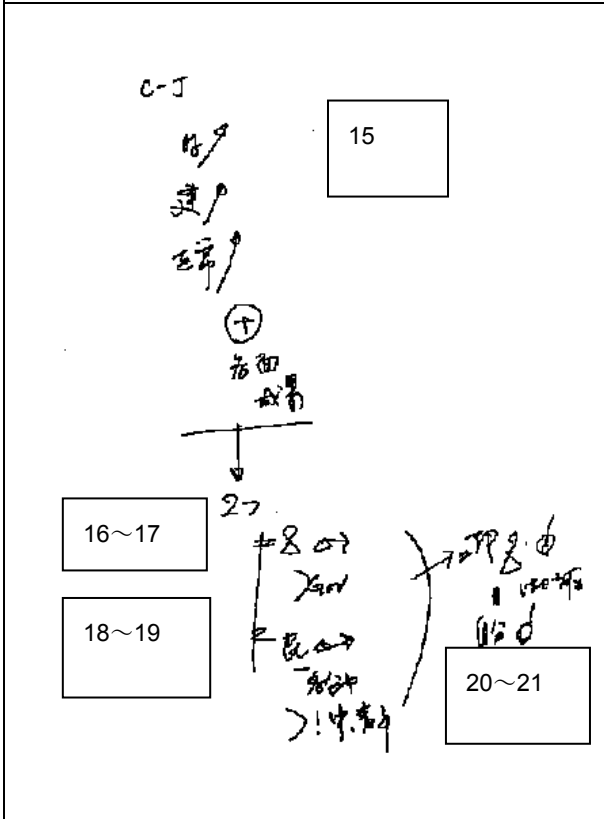
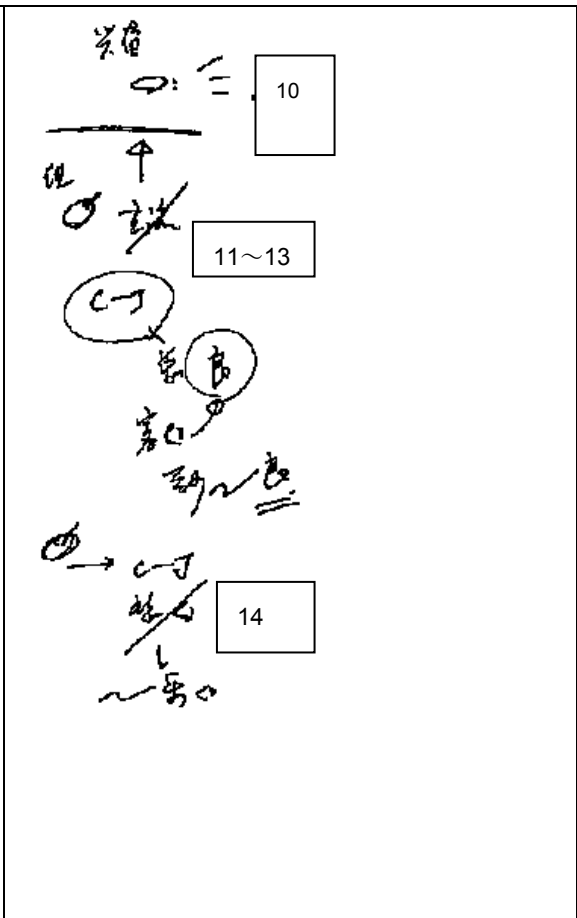
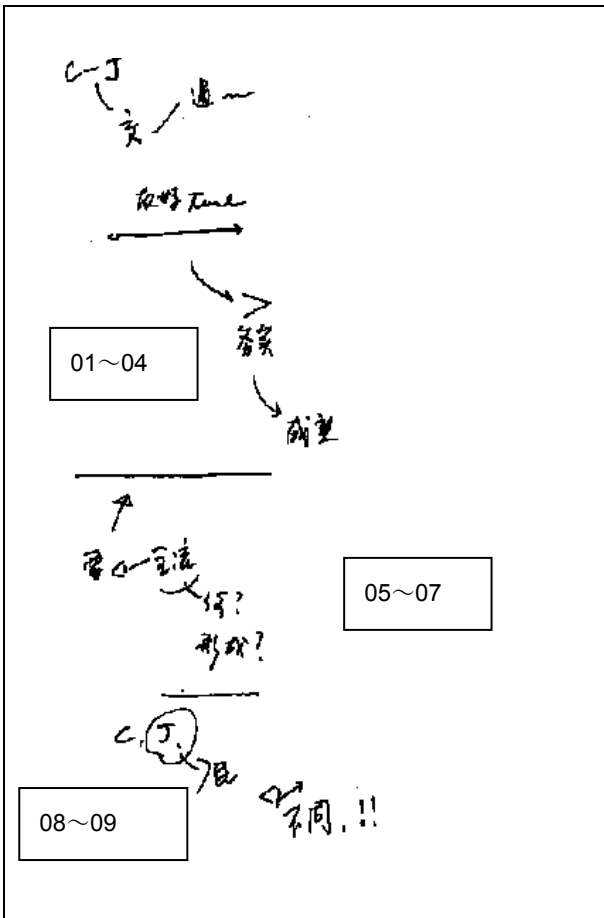


4. ノートの実際

この談話は全体的な構成が比較的シンプルで、情報の階層も明らかだ。結束性の高い談話であるということが出来る。つまり、論旨の展開が筋道だっていて、話の流れが比較的とらえやすい。通訳者がこのような談話を音声言語で受信しながら、どのように理解していくかということが長文逐次通訳のポイントとなるわけだが、その理解のあり方は、聞きながら書き記されていく NT に反映されると考えて差し支えないように思われる。通訳者は SL を聴取しつつ、既出情報と新出情報を照らし合わせ、両者の関連がどのようなものであるかを考慮しながら SL のテキストを理解していけば、NT はおのずから SL に含まれる情報の関連性によって配置されることになるだろう。

実際の NT 例¹⁴⁾は次ページに掲載されているように、メモの配置によって SL の構造を視覚的に反映したものになっていることがわかる。すなわち、線状性を有する言語を分断しつつ、分断された要素どうしの関係性を NT の配置によって示しているわけである。

このような能力と通訳能力の関連性を見るために、さらに通訳訓練の段階別にノートと比較してみる。48 ページに示した例のうち、左側の例は通訳入門クラスに入ったばかりの訓練生の NT で、右側の例は会議通訳者養成クラスで半年間学習した訓練生の NT である¹⁵⁾。



SL テキスト

コンピュータの 2000 年問題が起こるといふ西暦 2000 年まで、あと 1 年、正確に言えば、あと 11 ヶ月になりました。この問題は、プログラムの計算回路のなかで、西暦を表す数字を、1999 年を 99 というように、下 2 桁で表していることによって引き起こされます。すると、どういう問題が起こるかということ、2000 年になると下 2 桁が 00 になるため、コンピュータは、それが 1900 年なのか 2000 年なのか区別がつかないということになって、誤作動を起こしたり、極端な場合にはシステムそのものが停止する可能性があるということが予想されます。北半球の場合には、2000 年問題が発生する 1 月 1 日の午前零時は厳寒期にあたります。ですからこのとき、電力の供給停止やガスの供給が停止するなどの問題が起こり、人間の生命にかかわる心配があります。2000 年問題は危機管理上の重大な問題として懸念されているのです。

<p>1. 2000 → 西暦 2000 年まで、あと 1 年、正確に言えば、あと 11 ヶ月になりました。この問題は、プログラムの計算回路のなかで、西暦を表す数字を、1999 年を 99 というように、下 2 桁で表していることによって引き起こされます。すると、どういう問題が起こるかということ、2000 年になると下 2 桁が 00 になるため、コンピュータは、それが 1900 年なのか 2000 年なのか区別がつかないということになって、誤作動を起こしたり、極端な場合にはシステムそのものが停止する可能性があるということが予想されます。北半球の場合には、2000 年問題が発生する 1 月 1 日の午前零時は厳寒期にあたります。ですからこのとき、電力の供給停止やガスの供給が停止するなどの問題が起こり、人間の生命にかかわる心配があります。2000 年問題は危機管理上の重大な問題として懸念されているのです。</p> <p>2. 同様に 2000 (西暦) は 1900-2000 年まで、西暦 2000 年まで、あと 1 年、正確に言えば、あと 11 ヶ月になりました。この問題は、プログラムの計算回路のなかで、西暦を表す数字を、1999 年を 99 というように、下 2 桁で表していることによって引き起こされます。すると、どういう問題が起こるかということ、2000 年になると下 2 桁が 00 になるため、コンピュータは、それが 1900 年なのか 2000 年なのか区別がつかないということになって、誤作動を起こしたり、極端な場合にはシステムそのものが停止する可能性があるということが予想されます。北半球の場合には、2000 年問題が発生する 1 月 1 日の午前零時は厳寒期にあたります。ですからこのとき、電力の供給停止やガスの供給が停止するなどの問題が起こり、人間の生命にかかわる心配があります。2000 年問題は危機管理上の重大な問題として懸念されているのです。</p>	<p>2000 年問題</p> <p>Com 2000 年 誤り → 正 11 ヶ月後</p> <p>7094 計算ミス</p> <p>1999 年の下 2 桁 → 原因 09, 99</p> <p>1999 年 09, 99</p> <p>00 → 19-? → 20-? → 2000 年</p> <p>↓ 計算</p> <p>Stop 可能</p> <p>1999 年 09, 99</p> <p>電気が Stop → 生命の危険</p> <p>↓</p> <p>危険な状況発生?</p> <p>心配</p>
--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

通訳スクール受講者による NT 例 (左は入門クラス、右は会議通訳クラス)

5 結論

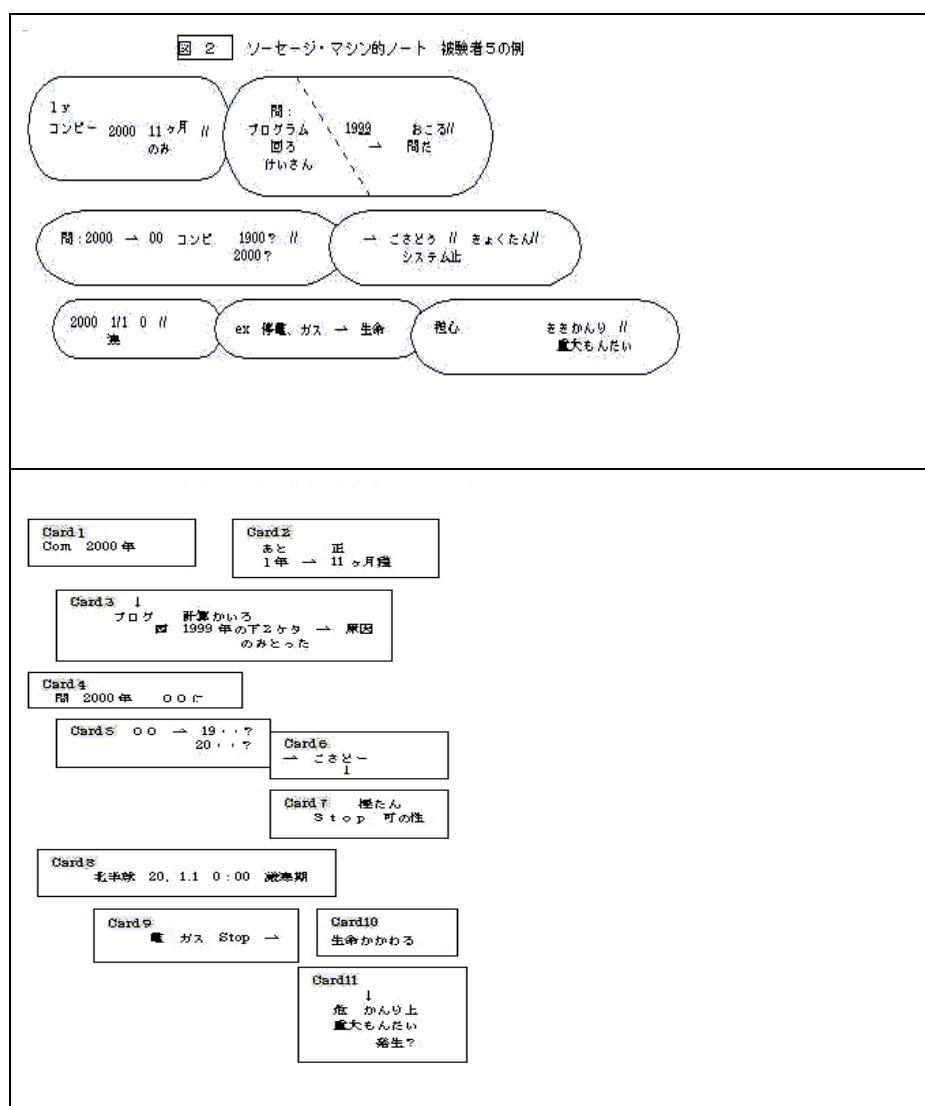
通訳者が通訳を行う時には「聴き方を通訳モードにスイッチする」ということをよく言う。では、その「通訳モード」とは何なのか、ということがこの研究の問題提起となった。通訳者あるいは長文逐次通訳にある程度慣れている人は、どのように談話を聴いているのかを、実際の SL とノートから考えてみようとしたわけである。

もちろん、談話の聞き取りと理解には、文字で表すことのできる言語情報だけでなく、

メタ言語情報や、非言語情報および通訳者の知識の程度など、多くの要素が関係してくるが、ここでは言語情報の受け取りだけを問題にした。

逐次通訳を行っているときに通訳者の頭の中で何が起きているのかは、かなりの程度までノートに反映されると考えてよいだろう。そのため、通訳者養成スクールの各レベル受講者が取ったノートを収集し、検討することによって、長文逐次通訳における談話理解の方策を探ってみようと考えた。収集したノートの一部は次のインターネット・サイトに掲載しているので、参照されたい (<http://member.nifty.ne.jp/NAGATA/note/note1.htm>)。

通訳に慣れていない段階では(訳出するという目的を考慮しすぎるのか)、SLに用いられた語をリニアに記録しようとする傾向が顕著である。一見して、以下のような典型的な「ソーセージ・マシン型」の形式¹⁶⁾が見られる。



通訳訓練が進むにつれ、徐々に談話の構造と情報階層を意識した形式に変わっていく。一見すると、とりとめのないメモに見えるが、逐次通訳を効果的に行うために、情報をまとまりごとに分断したうえ、さらにまとまりどうしの関係を意識し、一連の情報がどのような流れで進行しているのかを捉え、談話の展開を視覚的に配置して NT をおこなっていることがわかる。談話を全体としての的確に理解し、より効果的な伝達を行うための、通訳者の方策とは、情報の階層化および談話の構造的な理解にあると結論づけられるだろう。

「発話」が「プロダクトとしての言語行為」であるなら、「聴話」は積極的に対象を解析する「プロセスとしての言語行為」である。したがって、長文の逐次通訳訓練において、最も重要なことは談話全体の構造を階層的に理解する方策を指導することであると考えられる。そのためには、今後の課題として、スピーチ聞き取りの際に何を手がかりとするのか（ポーズ、プロミネンス、つなぎ語などの理解を促すためのマーカー）を、さらに細かく分析していきたい。

著者紹介：永田 小絵 (NAGATA Sae) 中国語通訳者として活躍する傍ら、獨協大学外国語学部言語文化学科非常勤講師および ISS 通訳研修センター講師などを勤める。日本学会理事。中国語翻訳・通訳の学習サイト「日華翻譯雑誌」を開設している (<http://member.nifty.ne.jp/NAGATA>)。連絡先：E-mail: s-nagata@a2.shes.net

【注】

- 1) ここでは複数のトピックを含み、1 分間以上にわたって話される談話（4 文～5 文からなる 1 段落またはそれ以上の長さの談話）の通訳を「長文逐次通訳」と定義する。
- 2) 通訳の種類を SL の発話開始から TL（目標言語）の発話開始までの時間的な距離から見ると同時通訳が最短、短文逐次通訳が 10 数秒から 20 秒程度でこれに次ぎ、長文逐次通訳が数十秒から数分間までと比較的長い。ここでは放送時差通訳は便宜上除外する。
- 3) ここでは、ひとつのトピックについて述べられる数秒間から十数秒間までの談話（多くが 1 文から 2 文程度）の通訳を「短文逐次通訳」と呼ぶ。この形式は「逐語通訳」と呼ばれることもある。
- 4) 通訳・翻訳における SL (source language: 起点言語) とはオリジナルに用いられた言語を指す。中国語から日本語への訳出においては中国語が SL である。
- 5) 通訳・翻訳における TL (target language: 目標言語) とは訳出に用いられた言語を指す。中国語から日本語への訳出においては日本語が TL である。
- 6) 別の側面から言えば、1 文での TL 変換では 1 語でも知らない（または聞き取れない）語があるだけで訳出が不可能になる可能性も高い。
- 7) A 言語は個人にとっての第 1 言語（母語）、B 言語は習得した第 2 言語（外国語）を指す。

- 8) 通訳者はその職業倫理として、話し手に談話を短く区切ることを要求すべきではない、ということではない。通訳者は必要に応じてより効果的に通訳を行えるように、話し手に正当な要求を行う権利を有する。しかし長文逐次通訳に対応できず、常に話し手に短文で区切るよう要求する通訳者は適切な職業能力を習得していないとみなすべきであろう。また、実際の通訳現場では、しばしば数分間から時には10分間以上にわたって話し続け、通訳者がそれを制止できない状況もある。
- 9) 逐次通訳時に訳出の補助手段としてSLの内容をメモすること。「通訳メモ」とも呼ぶ。
- 10) SLに含まれる情報と論旨の展開がTLにおいて正確に過不足なく再現されて聞き手に伝達されることによって生じるコミュニケーション効果。
- 11) これらの「ノートの取り方」については、永田 (1998) を参照。
- 12) EVS (ear-voice span): 聞き取り開始から訳出開始までの間隔。
- 13) 要するに、1文ごとあるいはごく短い時間で話し手と通訳者が交替する単文逐次通訳には特殊な通訳スキルが必要ではなく、通訳訓練を受けたことがなくても、第2言語の語学能力がある程度ありさえすれば素人でも対応が可能である。したがって、報告者は短文逐次通訳は、通訳研究または通訳教育研究の対象とする必要はないと考えている。
- 14) ここでは報告者(永田)のNTを通訳者が実際に取った例としてあげた。これは日本語をA言語とする通訳者がB言語(中国語)を聴取した際のNTの例である。
- 15) ISS通訳研修センター準備科受講者と本科受講者による。いずれもA言語(日本語)を聴取した際のNTの例である。したがってB言語の能力の如何はNTに影響を及ぼしていないと考えてよい。
- 16) 次々に送られてくる言語情報を最小限の意味単位で括りながらリニアに処理していく言語理解の方法。

【参考文献】

- 佐久間まゆみ、杉戸清樹、半澤幹一・編集 (1999) 『文章・談話のしくみ』おうふう
- 橋内武 (1999) 『ディスコース』くろしお出版
- 竹蓋幸生 (1984) 『ヒヤリングの行動科学』研究社出版
- 永田小絵 (1998) 「逐次通訳のノートテイキング指導」 『通訳理論研究』第14号, pp. 22-48.